ラーマーヌジャの瞑想論（5）
――『シュリー・バーシュヤ』Ⅲ. 3. 27〜34読解――

木　村　文　輝

キーワード：Rāmānuja、*Śrībhāṣya*、瞑想

第12節

sāṃparāye tartavyābhāvāt tathā hy anye //27//

［アートマンが身体から離れて］移行する時に、［知者の善業と悪業は残らず放棄される。知者にとっては、アートマンが身体から離れた後に、善業と悪業とによって生ずる］経験されるべきものがないが故に。［このことは、］同様に他［の支派］においても［示されている］。

〈441〉［知者達による］善業と悪業の放棄と、［他者に対するそれらの］贈与は、あらゆる明知に関して考察されるべきであると［第11節で］述べられた。

［知者達による］それ（善業と悪業）の放棄は、［アートマンが］身体から離れる時と、［アートマンが］身体から出離する途上［の二度にわたってなされるの］か、それとも、［アートマンが］身体から離れる時にのみ［一度だけなされるの］かという疑問が［生ずる］[1]。

【論者】二度にわたって［なされる］というのが適切である。二度にわたることが［聖典の中で］説かれているからである。なぜならば、カウシータキ派の人々（Kauṣītākinas）は次のように語っている。

「彼は、この神々の道（devayāna）という道を通り、アグニの世界へ赴く。」（Kau. Up. Ⅰ. 3）

から始まり、

「彼はヴィラジャー河に至る。［彼は］意（manas）によってそ［の河］を渡る。［彼は］自らの善業と悪業を振り落とす。」（Kau. Up. Ⅰ. 4）

［に至る一節］である。この記述では、［アートマンが身体から出離する］途上において善業と悪業の放棄が［なされると］理解される。一方、ターンディン派の人々（Tāṇḍinas）[2]

は、

「あたかも馬が体毛を［振り払う］ごとくに悪［業］を振り払い、あたかも月がラーフ（月食）の口から［逃れる］ごとくに［輪廻から］逃れ、身体を振り落とし、自己を確立した私は作られたものではないブラフマンの世界に到達する。」（Chā. Up. Ⅷ. 13. 1）

と［説いている］。そのため、ここでは、［アートマンが］身体から離れる時にこそ［善業と悪業の放棄はなされる］と理解される。シャーティヤーヤナ派の人々（Śāṭyāyanaka）も、

「彼の息子達は［業の］分け前を受け継ぎ、友人達は善業を［受け継ぎ］、敵達は悪業を［受け継ぐ］。」

と［述べている］。［ここでも、業の］遺産が息子達に移譲されるのと同時に、善業と悪業が［友人達と敵達に］移譲されると説かれており、［それらはアートマンが］身体から離れる時［になされる］と理解される。したがって、善業と悪業の一部は［アートマンが］身体から離れる時に放棄され、他方、残り［の善業と悪業］は［アートマンが身体から出離する］途上において［放棄される］。[3]

このように［論者によって］論じられたのに対して、「移行する時に」と答える。

【答論】「移行する時に。」すなわち、［アートマンが］身体から退去するまさにその時に、知者の善業と悪業は残らず放棄される。なぜか。「経験されるべきものがないが故に。」すなわち、知者にとっては、［アートマンが］身体から離れた後に、善業と悪業とによって［生ずる］経験されるべき享楽がないからである。なぜならば、明知の果報であるブラフマンへの到達以外に、善業と悪業とによって［生ずる］享受されるべき楽苦は［知者のもとには］存在しないからである。「同様に他［の支派］においても」、［アートマンが］身体から離れた後には、ブラフマンへの到達以外の楽苦の享受はないことが示されている。すなわち、

「実に、身体のない者（aśarīra）に、好ましいものと好ましくないものが触れることはない。」（Chā. Up. Ⅷ. 12. 1）

「この寂静なる者は、この身体から出た後に最高の光明に到達し、その後に本来の姿によって現れる。」（Chā. Up. Ⅷ. 12. 3）

「私が解脱しない限り、そこにはまさに遅延がある。その後に私は合一するだろう。」（Chā. Up. Ⅵ. 14. 2）

と［述べられている］。//27//

chandata ubhayāvirodhāt // 28 //

［善業と悪業の放棄は、アートマンが身体から離れる時のみであることを説く聖典の記述と、善業と悪業の放棄の本来のあり方との］両者に矛盾がないが故に、望みのままに、［聖典の語句のつながりは考えられるべきである］。[4]

善業と悪業が［知者によって］放棄される時が、［その］事柄の本来のあり方の故にこのように理解された場合には、「両者に矛盾がないが故に」。すなわち、［善業と悪業の放棄は、アートマンが身体から離れる時のみであることを説く］[5]聖典［の記述］と、［その］事柄（善業と悪業の放棄）の本来のあり方との間で矛盾がないが故に、「望みのままに」、すなわち、意図されたとおりに［聖典の］語句のつながり（padānām anvaya）は考えられるべきである。すなわち、『カウシータキ［・ウパニシャッド］』の記述において、

「［彼は］自らの善業と悪業を振り落とす。」（Kau. Up. Ⅰ. 4）

という、最後に説かれている記述の部分は、

「彼は、この神々の道（devayāna）という道を通り」（Kau. Up. Ⅰ. 3）

という、最初に説かれている部分よりも先に理解されるべきだという意味である[6]。//28//

〈442〉これに対して反論者が論難する。

gater arthavattvam ubhayathānyathā hi virodhaḥ //29//

［アートマンが身体から離れる時と、その後にアートマンが神々の道を進む途上という］二度にわたって［業の除去がなされる場合にのみ、神々の道を］行くこと［を説く聖典の記述］は意味を有する。なぜならば、そうでなければ、矛盾［が生ずる］が故に。[7]

【論者】善業と悪業の一部は［アートマンが］身体から離れる時に放棄され、残り［の善業と悪業］はその後に［放棄される］。このように、「二度にわたって」業の除去がなされる［と理解した］場合にのみ、「行くことは意味を有する」。すなわち、神々の道を行くこと［を説く］聖典［の記述］は意味を有するという意味である。「なぜならば、そうでなければ、矛盾［が生ずる］が故に。」すなわち、［アートマンが］身体から離れる時［に一度］だけですべての業が除去されるのであれば、微細な身体（sūkṣmaśarīra）も消滅することになる。もしもそうならば、アートマンのみが［単独で神々の道を］行くこと［になる。しかし、そのようなこと］は適切ではない。したがって、［アートマンが身体から］出離する時に、知者は残らず［すべての］業を除去するということは適切ではない。//29//

これに対する答論［を以下に示す］。

upapannas tallakṣaṇārthopalabdher lokavat //30//
［アートマンが身体から出離する時に、すべての業が除去されるということは］適切である[8]。それ（業を原因とすることのない身体との結合）[9]を特徴とするものが［聖典の記述から］認められるが故に。世間におけるのと同様である。

【答論】［アートマンが身体から］出離する時に、すべての業が除去されるということはまさに「適切である」。なぜか。「それを特徴とするものが認められるが故に。」すなわち、たとえ［すべての］業が除去されたとしても、本来の姿が顕現した［アートマン］には身体との結合を特徴とするものが［あることが、聖典の記述から］認められるからである。

「［この寂静なる者は］最高の光明に到達し、その後に本来の姿によって現れる。」（Chā. Up. Ⅷ. 12. 3）

「彼はそこで食べ、遊び、戯れつつ、歩き回る。」（Chā. Up. Ⅷ. 12. 3）

「彼は自らの支配者となる。彼はすべての世界で欲するままに行動する。」（Chā. Up. Ⅶ. 25. 2）

「彼は一つの者であり、三種の者である。」（Chā. Up. Ⅶ. 26. 2）

等［という記述］において、身体との結合というものが明らかに認められる。したがって、たとえ［すべての］業が除去されたとしても、微細な身体と結び付いた［アートマン］が神々の道を通って行くということは適切である。

【論者】たとえ微細な身体だとしても、［その身体を］生じさせる業が消滅した後に、［身体が］どのようにして存続するのか。

それに対して、我々は「明知の偉大性の故に」と答える。

【答論】なぜならば、たとえ明知はそれ自身では微細な身体を生じさせないとしても、また、たとえプラクリティにもとづく楽苦を享受する手段である粗大な身体（sthūla-śarīra）とすべての業が残らず除去されたとしても、［明知は］それ自体の果報であるブラフマンへの到達を実現させるために、神々の道を通ってその者（明知を持つ者）を行かせるべく、［その者のために］微細な身体を存続させるからである[10]。

「世間におけるのと同様である。」すなわち、世間において、穀物等を育てるために造られた貯水池等が、たとえその［建造の］理由やその［使用に対する］願望等が失われたとしても、まさにその貯水池等が壊れないように努めている人々は、そこで水を飲む

こと等を行う。それと同様である。//30//

〈443〉さて、［このような答論に対して次のような反論が］生ずるだろう。

【論者】最高なる実在（ブラフマン）を直証した知者達は、身体を捨て去る時に業を残らず除去し、身体を捨て去った。その後、［この者達には神々の道を］行くための微細な身体のみが付き従う。［この者達が］楽苦を経験することはない。［あなたによって］このように述べられた。［しかし、］それは適切ではない。

最高なる実在を直証したヴァシシュタ（vasiṣṭha）仙[11]やアパーンタラタマス（apāntaratamas）仙[12]をはじめとする者達は、身体を捨て去った後に別の身体と結び付き、息子の誕生や死等によってもたらされる楽苦を経験したことが［聖典の記述によって］認められる。

そこで、［次のような］答論を述べる。

yāvad adhikāram avasthitir ādhikārikāṇām //31//
任務を有する者達の、［その任務を生み出した業は、その］任務［が完了する］まで存続する。[13]

【答論】我々は、すべての知者達に関して、［彼らが］身体を捨て去る時に［彼らの］善業と悪業は消滅すると述べたのではない。そうではなくて、身体を捨て去った直後に、光線から始まる［神々の道という］経路に到達した知者達は、身体を捨て去る時に善業と悪業を放棄するということを［我々は］述べたのである。だが、ヴァシシュタ仙等という「任務を有する者達」[14]は、身体を捨て去った直後に、光線から始まる［神々の道という］経路に到達しない。既に機能し始めている（prārabdha）任務が完了していないからである。特定の業によって特定の任務に着手した彼らにとっては、［その］任務が完了するまで、そ［の任務］を生み出した業は除去されないのである。なぜならば、既に機能し始めている業は、［その業の果報が残らず］享受されることによってのみ除去されるからである。したがって、任務を有する者達の、そ［の任務］を生み出した業は、［その］任務［が完了する］まで存続する。したがって、彼らは身体を捨て去った直後に、光線から始まる［神々の道という］経路に到達することはないのである[15]。//31//

第13節

aniyamaḥ sarveṣām[16] avirodhaḥ śabdānumānābhyām //32//
［特定の念想に専心する人々だけがブラフマンに到達するという］制約はない。［すべてのブラフマンの念想に専心する］すべての人々が［ブラフマンのもとに行くのであれば］、聖言（天啓聖典）と推論（伝承聖典）との間で矛盾はない。

〈444〉ウパコーサラ［・ヴィディヤー］[17]等の念想（upāsana）に関して、光線から始まる［神々の道という］経路[18]が［聖典に］説かれている。そ［れらの特定の念想］に専心する人々のみが、そ［の経路］によってブラフマンに到達するのか、それとも、すべてのブラフマンの念想に専心する［すべての］人々が［ブラフマンに到達するのか］。このような疑問に対して［論者が次のように述べる］。[19]

【論者】他の人々（他の念想に専心する人々）に関しては［聖典に］述べられていない。すなわち、

「また、森において、信仰にもとづいて苦行（tapas）を念想するこれらの者達は」（Chā. Up. V. 10. 1）

「信仰にもとづいて実在（satya）を念想する者達は」（Bṛ. Up. VI. 2. 15）

という［記述］には、［それらが］他のすべてのブラフマンの明知（brahmavidyā）を思い起こさせるものであることを示す認識手段も存在しない[20]。故に、それ（ウパコーサラ・ヴィディヤー等の特定の念想）に専心する人々のみが［ブラフマンに到達する］。

このように［論者によって］論じられたのに対して、［我々は］「制約はない」と答える。

【答論】「すべての人々が」、すなわち、［ブラフマンを対象とする］すべての念想に専心する［すべての］人々が、まさにそれ（神々の道）を通って［ブラフマンのもとに］行くべきである。故に、それ（ウパコーサラ・ヴィディヤー等の特定の念想）に専心する人々だけが［ブラフマンに到達する］という制約は存在しない。すべての人々が、まさにそれ（神々の道）を通って［ブラフマンのもとに］行くのであれば、「聖言と推論との間で」、すなわち、天啓聖典と伝承聖典との間で「矛盾はない」からである。そうでなければ、必ずや矛盾があるという意味である。

天啓聖典は、例えば『チャーンドーギヤ［・ウパニシャッド］』やヴァージャサネーヤ派［の聖典］の中で、パンチャアグニ・ヴィディヤー（五火の教え）に関連して、光線から始まる［神々の道という］道程を通って、すべてのブラフマンの念想に専心する［すべての］人々が［ブラフマンのもとに］行くことを説いている。

「これをこのように知る者達、また、森において、信仰にもとづいて実在を念想する者達は、光線［から始まる道］に至る。」（Bṛ. Up. Ⅵ. 2. 15）

と、ヴァージャサネーヤ派［の聖典には説かれており］、

「それをこのように知る者達、また、森において、信仰にもとづいて苦行を念想するこれらの者達は、光線［から始まる道］に至る。」（Chā. Up. Ⅴ. 10. 1）

と、『チャーンドーギヤ［・ウパニシャッド］』［には説かれている］。［この『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』の記述の中で、］「それをこのように知る者達」という［一節］はパンチャアグニ・ヴィディヤーに専心する者達を、「また、森において、……これらの者達は」から始まる［一節］は、信仰にもとづいてブラフマンを念想する者達を示しており、その上で、［彼らが］光線から始まる［神々の道という］経路［に到達すること］を説いている。

「ブラフマンは実在（satya）、知、無限である」（Tai. Up. Ⅱ. 1）

「一方、実在（satya）こそが知られるべきである。」（Chā. Up. Ⅶ. 16. 1）

という［記述の中で］、「実在（satya）」という語がブラフマン［を示していること］は確立されている。また、「苦行（tapas）」という語もそれと同じ意味を示している。故に、「実在」と「苦行」という語は［いずれも］ブラフマンのみを示しているのである[21]。また、信仰にもとづいてブラフマンを念想することは、他の箇所でも説かれている。すなわち、

「一方、実在こそが知られるべきである。」（Chā. Up. Ⅶ. 16. 1）

から始まり、

「一方、信仰こそが知られるべきである。」（Chā. Up. Ⅶ. 19. 1）

という［部分までの記述である］。

また、伝承聖典も[22]、

「火、光、昼、月の満ちる半月、太陽の北行する半年。その間に、［身体から］離れたブラフマンを知る者達は、ブラフマンに到達する。」（BhG Ⅷ. 24）

と［説いており］、ブラフマンを知るすべての者達が、まさにこの［神々の道という］経路を通って［ブラフマンのもとへ］行くと述べている。同様の［内容を説く］天啓聖典や伝承聖典が多数存在する。このように、すべての明知に共通するこの［神々の道という］経路は、既に論証されたものとしてウパコーサラ・ヴィディヤー等に関して繰り返し説かれているのである。//32//

第14節

akṣaradhiyāṃ tv avarodhaḥ[23] sāmānyatadbhāvābhyām aupasadavat tad uktam //33//

だが、不滅なるもの［が有する諸属性］の思念は［すべての明知に］内包されている。［すべての明知において瞑想されるべき対象の］共通性と、［それらの諸属性が］それ（ブ

ラフマンの本質の理解）の中に存することとの故に。ウパサドゥ祭に用いられる［真言］と同様である。そのことは［『初篇（prathamakāṇḍa）』において］述べられている。

〈445〉『ブリハッド・アーラニヤカ［・ウパニシャッド］』において［次のように］説かれている。

「ガールギーよ。それこそはバラモン達が「不滅なるもの」と呼ぶかのものだ。それは粗大でなく、微細でなく、短くなく、長くなく、赤くなく、粘着性でなく、陰がなく、闇がなく、風がなく、虚空がなく、執着がなく、味がなく、臭いがなく、目がなく、耳がなく、語がなく、意がなく、熱がなく、気息がなく、顔がなく、量がなく、内がなく、外がなく、何物をもそれは食べない。……ガールギーよ。実にこの不滅なるものの命令により、これら太陽と月は分かれて存在する。」（Bṛ. Up. Ⅲ. 8. 8-9）

同様に、アタルヴァ［・ヴェーダ派］においては［次のように説かれている］。

「次に、高次［の明知］とは、それによってかの不滅なるものが理解されるものである。それは見えないもの、捉えられないもの、種姓（gotra）のないもの、ヴァルナのないもの、目や耳のないもの、手や足のないものである。」（Mu. Up. I. 1. 5-6）

それに関して［次のような］疑問が生ずる[24]。すなわち、「不滅なるもの（akṣara）」という語で示されているブラフマンと結び付いていると［聖典の中で］説かれているこれらの「粗大でないこと（asthūlatva）」等［の諸属性］は、現象世界（prapañca）とは相反する［ブラフマンの］本質である。［これらの諸属性は、］すべてのブラフマンの明知において瞑想されるべきなのか、それとも、［それらの諸属性が］説かれている箇所［で示されているブラフマンの明知］においてのみ［瞑想されるべきなのか］。いずれが適切なのか。

【論者】［それらの諸属性が］説かれている箇所［で示されているブラフマンの明知］においてのみ［瞑想されるべきである］。なぜか。ある明知にとって本質となる［ブラフマンの］諸属性が、他の明知にとって［も同様に］本質であるという［ことを示す］認識根拠（pramāṇa）がないからである。また、［「粗大でないこと」等のように、ある特徴の］否定を本質とするこれらの諸属性は、「歓喜（ānanda）」等のように［ブラフマンの］本質を理解するための手段とはなりえないからである。なぜならば、「歓喜」等によって理解される本質をもつブラフマンには、「粗大でないこと」[25]等という現象世界における特徴は否定されるからである。というのも、依り所のないものに対する否定はありえないからである。

このように［論者によって］論じられたのに対して、我々が答える。

【答論】「だが、不滅なるものの思念は内包されている。」すなわち、不滅なるものであるブラフマンに関する「粗大でないこと」等の「思念（dhī）」は、すべてのブラフマンの明知に「内包されている」、つまり、集められているという意味である。なぜか。「共通性と、それの中に存することとの故に。」すなわち、すべての念想において念想されるべき対象である不滅なるものであるブラフマンは共通だからであり、「粗大でないこと」等［という諸属性］は、それ（ブラフマン）の本質の理解（pratīti）に含まれているからである。すなわち、述べられているのは次のことである。

実に、事物の把握とは、ある固有の形態（ākāra）によって［その事物を］把握することである。単なる歓喜（kevalānanda）等は、ブラフマンの固有の形態（ākāra）[26]を生じさせるものではない。個我（pratyagātman）の中にも歓喜（ānanda）等は認められるからである。なぜならば、悪しき［属性］とは正反対の歓喜等はブラフマンの固有の性質（rūpa）だからである[27]。一方、個我は本質的には悪しき［属性］から離れているけれども、悪しき［属性］と結び付く可能性がある。悪しき［属性］とは正反対であることは、精神的なもの（cit）や非精神的なもの（acit）からなる現象世界（prapañca）における属性（dharma）である「粗大であること（sthūlatva）」等に反する性質（rūpa）である。したがって、［ブラフマンの］固有の形態によってブラフマンを考究する者にとっては、「粗大でないこと」等［の属性］によって限定された知識（jñāna）や歓喜等を形態としているブラフマンが考究されるべきである。故に、「粗大でないこと」等は、歓喜等と同様に、ブラフマンの本質（svarūpa）の理解に含まれている。それ故、あらゆるブラフマンの明知の中で、まさにそのようなものとしてブラフマンは考究されるべきである。以上が［「共通性と、それの中に存することとの故に」ということの論旨である］。[28]

諸属性は［それが依拠する］主体（pradhāna）に従属していることに関して[29]、実例を［示して］「ウパサドゥ祭に用いられる［真言］と同様である」と述べる。例えば、ジャマドゥアグニ仙（Jamadagni）に帰せられるチャトゥーラートラ祭（Catūrātra）[30]における、米菓（puroḍāś）等［を用いる］ウパサドゥ祭（Upasad）[31]の従属的な要素（guṇa）であり、［本来］サーマ・ヴェーダにおいて高唱されるものである、

「実に、アグニ神はホートリ祭官の役割を知れ。」（*Tāṇḍya Brāhmaṇa* XXI. 10. 11）[32]

から始まる真言（mantra）は、［ウパサドゥ祭という］主体に従属するものであるため、［ウパサドゥ祭を規定している］ヤジュル・ヴェーダの低唱によって読誦される[33]。そのことは、『初篇（prathamakāṇḍa）』において［次のように］述べられている。

「［祭式の］従属的な要素と主体［である祭式そのもの］とが対立した場合[34]、［前者は］それ（祭式）を目的とするものであるため、ヴェーダ［の規定］の適用は主

体［である祭式］による。」（MS Ⅲ. 3. 9）[35]

//33//

〈446〉

【問】このように、あらゆるブラフマンの明知において、ブラフマンのみが諸属性を有する者（guṇin）であり、諸属性は主体［たるブラフマン］に従属するものであるから、

「［彼は］すべての行為であり[36]、すべての香りであり、すべての味である。」（Chā. Up. Ⅲ. 14. 2）

等［の記述］によって［示されている］諸属性の集まりは、個々の明知の中に別々に含まれているとしても、［その諸属性の集まりが、ある特定の明知の中に］含まれないこともあるだろう。

それに対して答える。

iyadāmananāt //34// [37]

思念の故に、同数のもの（ブラフマンの本質の考究に不可欠な諸属性の集まり）［が考究されるべきである］。

「思念（āmanana）」とは、［対象と］向かい合うことによる（ābhimukhyena）瞑想（manana）、すなわち完全な思念（anucintana）である。「思念の故に（āmananāt）」、すなわち、［この］理由の故に、「同数のもの（iyad）」のみが、すなわち、諸属性の集まりがあらゆる［明知の］中で瞑想されるべきであると論証される。つまり、「粗大でないこと」等によって限定された歓喜等［が、あらゆる明知の中で瞑想されるべき］である。ある諸属性の集まりがなければ他とは異なるものとしてのブラフマンの本質を考究できないという場合、そ［の諸属性の集まり］は常に［ブラフマンに］付随する。そ［の諸属性の集まり］が、「同数のもの」に他ならないという意味である。

一方、他［の諸属性］、すなわち、「すべての行為を持つ者であること（sarvakarmatva）」等［の諸属性］は、主体［であるブラフマン］に従属しているとしても、［個々の明知の中で］考究されるべきものとして、個々の明知の中に別々に含まれているのである[38]。//34//

註

本稿は、拙稿「ラーマーヌジャの瞑想論（１）」（『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社 , 2014, pp. 247-259）、「同（２）」（『愛知学院大学人間文化研究所紀要　人間文化』29, 2014, pp. 312-301）、「同（３）」（『愛知学院大学人間文化研究所紀要　人間文化』31, 2016, pp. 264-252）、「同（４）」（『愛知学院大学人間文化研究所紀要　人間文化』32, 2017, pp. 226-212）の続編である。和訳に際しての底本と参考書、ならびに、註で使用する略号と文献は上掲拙稿を参照されたい。

1　この sūtra に対する Śaṅkara の問題設定は、業の放棄は ātman が身体から離れる時に起こるのか、それとも ātman が神々の道（devayāna）を通る途上で起こるのかというものである。ただし、その結論は、Rāmānuja と同じく ātman が身体から離れる時に起こるというものである。

2　ŚP ad ŚBh Ⅲ. 3. 27（vol. 2 p. 491 ll. 1-2）によれば、Tāṇḍin 派は Chandoga 派のことである。なお、Śaṅkara は Tāṇḍin 派と Śāṭyāyana 派の見解を、sūtra に示されている「他［の支派］（anye）」の主張として挙げている（Ś. BSBh Ⅲ. 3. 27）

3　反論者の見解は、ŚBh Ⅲ. 3. 29 で改めて示される。

4　Śaṅkara は sūtra の中の「望みのままに（chandata）」の部分を、ātman が身体から離れる前、すなわち生前において、「望みのままに」善悪の業を滅するための努力を行うべきだと解釈している。また、「両者に矛盾がないが故に（ubhayāvirodhāt）」の部分には、そのように解釈すれば、業を滅するための努力という原因と、業の消滅という結果の「両者」に矛盾がないことと、Tāṇḍin 派と Śāṭyāyana 派の「両者［の見解］」に矛盾がないことという二つの内容を含めているようである。一方、Bhāskara はこの sūtra を、「望みのままに、善業と悪業を他者に与える。両派の聖典に矛盾がないが故に」と解釈している。［中村 1951: 297］は、sūtra の構文や前の sūtra との関係から考えると、Bhāskara の解釈が最も妥当であろうと評している。

5　ŚP ad ŚBh Ⅲ. 3. 28（vol. 2 p. 492 ll. 2-3）による。

6　Kau. Up.　Ⅰ. 4 と同 Ⅰ. 3 の記述は、説かれているのとは反対の順番で理解されるべきであり、ātman は善悪の業を除去した後に神々の道へ進むと理解すべきだということが、この箇所の趣旨である。この点に関しては ŚP ad ŚBh Ⅲ. 3. 28（vol. 2 p. 492 ll. 4-6）、及び R 訳（vol. 3 p. 281 n. 1）を参考にした。

7　Śaṅkara と Bhāskara はこの sūtra を定説者の見解とみなしている。その上で Śaṅkara は、身体から離れた ātman は、神々の道を通る場合と通らない場合の「二通り（ubhayathā）」があり、Brahman を直証した者は、それを通る必要がないことがこの sūtra と次の sūtra では説かれていると解釈している。一方、Bhāskara は、身体から離れた ātman が神々の道を通る際には、善業の放棄と悪業の放棄という「二通り（ubhayathā）」がともに実現されることがこの sūtra で示されていると解釈した。［中村 1951: 298］は、ここでも Bhāskara の解釈が最も妥当であろうと評している。

8　この sūtra の中の「適切である（upapannas）」の部分を、Śaṅkara は前注で述べたように、神々の道を通る場合と通らない場合があることは「適切である」と解釈し、Bhāskara は身体から離れた ātman が神々の道を通ることは「適切である」と解釈している。［中村 1951: 298］は、ここでも Bhāskara の解釈が妥当であろうと評している。

9　ŚP ad ŚBh Ⅲ. 3. 30（vol. 2 p. 492 l. 12）による。あわせて次注も参照。

10　ŚP ad ŚBh Ⅲ. 3. 30（vol. 2 p. 492 l. 14）によれば、微細な身体（sūkṣmaśarīra）は「業によって生

み出されたもの、すなわち、prakṛti にもとづく（prākṛta）身体ではない」。この微細な身体は、明知の力によって存続するものであり、身体から離れた ātman が天界に到達するまで ātman に付き従うものである。上記については R 訳（vol. 3 p. 283 n. 1）も参考にした。

[11] Vasiṣṭha 仙は Veda 時代の仙人であり、彼に帰せられる真言を伝えるために、繰り返しこの世に生まれたという。この点に関しては ŚBh Ⅰ. 3. 28 を参照。また、Purāṇa 文献によれば、彼は最初に Brahmā 神の意（manas）によって Prajāpati 神として生まれたが、その後、改めて Mitra 神と Varuṇa 神の息子として生まれたという。以上、Ś. BSBh Ⅲ. 3. 32 及び R 訳（vol. 3 p. 285 n. 1）による。さらに、その他の伝説については P. V. Kane, *History of Dharmaśāstra*, vol. 5, 2nd ed., Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1977, pp. 1536-1537 を参照。

[12] この者の名前を G 本、U 本、R 訳はいずれも Avāntaratapas と記している。一方、Śaṅkara と Bhāskara は本稿の底本と同じく Apāntaratamas と記している。ちなみに、この Apāntaratamas 仙は、Veda を伝えるために繰り返しこの世に生まれた Vyāsa 仙の初期の化身であり、MBh XⅡ. 337. 61 にも「かの Apāntaratamas は veda の師（ācārya）であると言われている」と記されている。以上、R 訳（vol. 3 p. 285 n. 1）を参考にした。また、Ś. BSBh Ⅲ. 3. 32 によれば、彼は Viṣṇu 神の指令によって、Kali 期と Dvāpara 期の接する時期に、Kṛṣṇa-dvaipāyana として生まれたとも伝えられている。なお、Śaṅkara は、身体を捨て去った後に別の身体と結び付いた者の例として、Vasiṣṭha 仙や Apāntaratamas 仙以外にも、Bhṛgu 仙、Sanatkumāra 仙、Dakṣa 仙、Nārada 仙の名前を挙げている。

[13] Śaṅkara と Bhāskara はこの sūtra と次の sūtra の順序を入れ替えている。

[14] この任務（adhikāra）の内容を Rāmānuja は示していないが、Śaṅkara はそれを「世界の持続の原因であるヴェーダを弘めること等（vedapravartanādi lokasthitihetu）」（Ś. BSBh Ⅲ. 3. 32, p.733 l. 4）、Bhāskara は「世界の保持を目的とするもの（lokānugrahārtha）」（Bh. BSBh Ⅲ. 3. 32, p. 187 l. 22）と解説している。

[15] Śaṅkara はこの sūtra が扱う問題を、Brahman の明知を得た者が、死後に再び別の身体と結び付くことがあるのか否かという点だと解説し、その者が神々の道を通ることの是非には触れていない。しかし、これは本稿注7で記したように、Śaṅkara が身体から離れた ātman は神々の道を通る場合と通らない場合の「二通り」があることを認めており、しかも、明知を得た者はそれを通る必要がないと考えていることから当然の解釈である。その上で彼は、明知を得た者でさえも死後に再び別の身体と結び付くことがあることを認め、その理由を次のように記している。

> 「Apāntaratamas 仙をはじめとする者達は、たとえ［自らが］自在者（īśvara）だとしても、最高自在者（parameśvara）によってそれぞれの任務に結び付けられている。［彼らは、］たとえ独存（kaivalya）をもたらす完全な見証（samyakdarśana）の中にあろうとも、残存する業によって、任務がある限り［身体との結び付きを］持続する。そして、そ［の業］が止滅した時に、［身体から］離れるということは矛盾ではない。」（Ś. BSBh Ⅲ. 3. 32, p.733 ll. 9-11）

このように、既に機能し始めている業が残存している限り、身体との結び付きは継続されるという考え方は Rāmānuja と共通するものである。Rāmānuja はこの理論を応用することで、天啓聖典に関わることを禁じられている śūdra でさえも、明知を保持し得る可能性を承認した。この点に関しては拙著『ラーマーヌジャの救済思想』（山喜房佛書林、2014）pp. 478-499 を参照されたい。

[16] Śaṅkara と Bhāskara は、この部分を sarvāsām としている。ただし、Bhāskara は注釈の中で、この語を sarveṣām と読み替えている（Bh. BSBh Ⅲ. 3. 31, p. 187 l. 8）。

[17] Upakosala-vidyā とは、Upakosala 仙の名前を冠せられた vidyā であり、Chā. Up. Ⅳ. 10-15 に示されている。

[18] 「光線から始まる」神々の道については、BS Ⅳ. 3 で詳しく論じられる。

19　この sūtra に対する Śaṅkara と Bhāskara の注解は、基本的には Rāmānuja のそれと一致している。その際、Śaṅkara ははじめに、Paryaṅka-vidyā（Kau. Up. Ⅰ）、Upakosala-vidyā（Chā. Up. Ⅳ. 10-15）、Pañcāgni-vidyā（Bṛ. Up. Ⅵ. 2, Chā. Up. Ⅴ. 3-10）、Dahara-vidyā（Bṛ. Up. Ⅳ. 4, Chā. Up. Ⅷ. 1-6）においては神々の道が示されており、一方、Madhu-vidyā（Bṛ. Up. Ⅱ. 5, Chā. Up. Ⅲ. 1-11）、Śāṇḍilya-vidyā（Bṛ. Up. Ⅴ. 6, Chā. Up. Ⅲ. 14）、Ṣoḍaśakala-vidyā（Praśna Up. Ⅵ）、Vaiśvānara-vidyā（Chā. Up. Ⅴ. 11-24）においてはそれが示されていないことを指摘する。その上で、「［身体から離れた ātman が神々の道を通ることは、］この経路（神々の道）が説かれている箇所［で示されている vidyā］のみに制約されるべきものか、それとも、制約されることなく、同じようなすべての vidyā に関わるべきものか」（Ś. BSBh Ⅲ. 3. 31, p. 730 ll. 7-8）という問題を提示し、後者の立場が定説者のものであることを詳細に解説している。ただし、Śaṅkara は本稿注7で記したように、身体から離れた ātman の中でも、Brahman を直証した者は神々の道を通らないと考えているため、この sūtra における議論の対象は、それ以外の ātman に限定される。この点を、Śaṅkara は Ś. BSBh Ⅲ. 3. 31（p. 730 l. 4）において、ここでの議論の対象は「有属性（saguṇa）」の Brahman の明知に関わるものであり、「無属性（nirguṇa）」の Brahman の明知は関係ない事柄であることを明記している。

20　ŚP ad ŚBh Ⅲ. 3. 32（vol. 2 p. 496 l. 12）によれば、論者は、ここに引用されている2つの記述の中の「苦行（tapas）」と「実在（satya）」という語に、Brahman を示す機能がないことを指摘している。ただし、この論者の主張は、この sūtra の注釈の後半で定説者によって否定されている。ちなみに、引用されている2つの記述は、いずれも Pañcāgni-vidyā に関するものである。

21　この点に関して ŚP ad ŚBh Ⅲ. 3. 32（vol. 2 p. 496 ll. 15-16）は、「satya という語が Brahman を示していることが認められ、それによって、tapas という語もそれを示していることが認められる。tapas という語も［それを示していることは］、「最高者は偉大なる苦行である（paramaṃ yo mahat tapaḥ）」等［という聖典の記述］から認められる」と注解している。

22　Śaṅkara は、ここで指摘されている伝承聖典として BhG Ⅷ. 26 を引用している。

23　Bhāskara はこの部分を avirodhaḥ としている。

24　この sūtra に対しては、Śaṅkara と Bhāskara も Rāmānuja と同じ聖典の記述を指摘し、同じ趣旨の解釈をしている。

25　底本、G 本、U 本は、いずれもこの部分を sthūlatva と記している。しかし、文脈上、ここは asthūlatva と理解されるべきだと考えた。この点に関しては R 訳（vol. 3 p. 288）も同様の見解を示している。

26　ŚP ad ŚBh Ⅲ. 3. 33（vol. 2 p. 499 l. 10）は ākāra という語を svarūpa と置き換えている。

27　Rāmānuja によれば、個我（pratyagātman）も Brahman と同様に、歓喜を本質的な属性として有している。しかし、個我は輪廻に巻き込まれることによって、その歓喜が制限される可能性を有している。一方、Brahman は輪廻とは無関係であり、その本質的な属性が制限されることはない。それ故、個我の有する歓喜は「単なる歓喜（kevalānanda）」と称されるのであり、それが Brahman の固有の形態（本質）であることはない。だからこそ、Brahman の「固有の性質」は「悪しき属性とは正反対の歓喜等」なのである。この点については前掲拙著（本稿注15参照）pp. 140-144 を参照されたい。

28　Rāmānuja の説く「悪しき属性を持たないこと」とは、「業（karman）と呼ばれる無明（avidyā）」の支配を永遠に受けることなく、それ故に、prakṛti と結合することもないことを示していると考えられる。それ故、業の影響とは無関係である Brahman は、prakṛti が生み出す限定的な質量とは無関係である。したがって、Brahman が「粗大であること」等の性質と結び付くことはない。そ

のことが、ここでは「粗大でないこと」と表現されているのであり、それは歓喜等と同様に、あらゆる vidyā において考究されるべき Brahman の本質だと述べられているのである。なお、この箇所の記載については前掲拙著（本稿注 15 参照）pp. 433-435 も参照されたい。

29　ŚP ad ŚBh Ⅲ. 3. 33（vol. 2 p. 500 ll. 5-6）はこの箇所を、「他の典拠にしたがって瞑想されるとしても、「粗大でないこと」等の諸属性（dharma）が主体（pradhāna）である属性を持つ者（dharmin）に従うことは適切である」と注解している。すなわち、ある vidyā を説いている聖典の記述の中で、たとえ「粗大でないこと」等の属性が言及されていないとしても、それは属性を持つ者、すなわち「主体」である Brahman の本質であるが故に、あらゆる Brahman の瞑想において考究されるべきだということである。

30　Catūrātra 祭とは4日間にわたって行われる供犠であり、Jamadagni 仙がしばしば行ったことから、彼の名にちなんで Jāmādagnya とも呼ばれる。詳細は Tai. Sam. Ⅶ. 1. 9、及び *Tāṇḍya Brāhmaṇa* XXI. 10. 11 を参照とのことである。ただし、筆者未見。R 訳（vol. 3 p. 289 n. 1）を参考にした。

31　Upasad 祭は、soma を圧搾する Sutyā 祭に先立って数日間続けられる Jyotiṣṭoma 祭の一部である。そこでは、1 番から 12 番までの皿に載せた米菓（puroḍāś）が用いられ、それらが供えられる際には順に 12 種類の真言が唱えられる。本文中に引用されている真言は、その中で最初に唱えられるものである。以上、R 訳（vol. 3 p. 289 n. 1）、及び［金倉 1984b: 338 n. 1］による。

32　原典は筆者未見。典拠は K 訳と R 訳によった。なお、この真言を底本と G 本は agnir vai hotraṃ vetu と記しているが、U 本はそれとともに agne ver hotraṃ veḥ という異読を伝え、Ś. BSBh Ⅲ. 3. 33 の底本（p.737 1. 1）は agner ver hotraṃ veradhvaram、Bh. BSBh Ⅲ. 3. 33 の底本（p. 188. ll. 12-13）は agnir vai hotraṃ veradhvarasya と記している。

33　Upasad 祭で唱えられる真言は Sāmaveda 所属の Udgātṛ 祭官に起源を有するものである。一方、Upasad 祭は Yajurveda によって規定されたものであるため、Upasad 祭の中で、これらの真言は Yajurveda 所属の Adhvaryu 祭官によって唱えられる。ところが、Sāmaveda では真言を高唱することになっているのに対して、Yajurveda では低唱することになっている。そのため、Upasad 祭において、それらの真言は高唱されるべきか、それとも低唱されるべきかが問題となる。結論は、本文で後述されている MS Ⅲ. 3. 9 に従って、儀式の主体である Upasad 祭が Yajurveda のものであるため、そこで唱えられる真言もそれに従って低唱されるべきだということである。以上、Ś. BSBh Ⅲ. 3. 33 及び R 訳（vol. 3 p. 289 n. 1）を参考にした。

34　ŚP ad ŚBh Ⅲ. 3. 33（vol. 2 p. 500 l. 4）は vyatikrama という語を virodha と置き換えて説明している。

35　Mohan Lal Sandal, *Mīmāṃsā Sūtras of Jaimini*, vol. 1,（reprint, Delhi: Motilal Banarsidass, 1980）, p. 112 は、この sūtra を次のように解説している。

「Agnyādhāna（祭火の設置）は Yajurveda と結び付いた儀式であるが、Sāma［-veda の讃歌］がそこで読誦される。儀式が主体であり、讃歌の読誦はその中の一部であるから、主体［である儀式］が讃歌の読誦を支配する。それ故、Agnyādhāna が行われる際には、Sāma［-veda］の讃歌は低唱されることになる。」

36　Chā Up. Ⅲ. 14. 2 の原本では、「すべての行為であり（sarvakarmā）」の後に「すべての欲望であり（sarvakāmaḥ）」と記されている。

37　Rāmānuja はこの sūtra を前の sūtra の補足とみなすが、Śaṅkara と Bhāskara は独立の節として論じている。Śaṅkara 達はこの sūtra の問題を、Mu. Up. Ⅲ. 1. 1 に説かれている vidyā と、Kaṭha Up. Ⅲ. 1 に説かれている vidyā は同一か否かということだと設定し、その両者は同一であると結論づけている。

38 ŚP ad ŚBh Ⅲ. 3. 34（vol. 2 p. 500 ll. 7-10）は、この sūtra の趣旨を次のように解説している。
【問】［Brahman に関して、］「粗大でないこと」等という多くの諸属性が多数の支派によって説かれている。それらがすべての明知（vidyā）に含まれるのであれば、それらは多数であるため、すなわち、主体［である Brahman］に従属するものであることが論証されている「すべての行為を持つ者であること（sarvakarmatva）」等［という諸属性］は無数に存在するため、それらを統合（upasaṃhāra）［して、すべての vidyā の中で瞑想されるべき要素と］することはできない。
【答】Brahman の、［他とは］異なる形態を瞑想するためには、［Brahman 固有の本質であると］論証されている諸属性の集まりと同数のもののみが［統合されるべきである］。

略号と文献補遺

2、『シュリー・バーシュヤ』以外のテキスト

Bh. BSBh: Bhāskara's *Brahmasūtra-bhāṣya*. Ed. by Pandit Vindhyesvarī Prasāda Dvivedin, *Brahmasutra with a Commentary by Bhāskarāchārya*.（Chowkhamba Sanskrit Series 20）, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1991.